

1.3. 問題の音対応：語中の 2 子音連続 *-ks-

この節では、本稿で問題とする音対応を示すとともに、本稿の仮説ならびに結論の着地点を示す。

ここで池上 (1989) が次のような語の音対応を基に、祖形 *-ks- を示している 1 つの音対応がある。

「唾～よだれ」：(Ew) ʃalsa || (Ek) ʃaliksa || (S) ʃalikči || (N) ʃalsa || (U) ʃalehæ || (Oc) diloksa || (Na) ʃiloksa || (Ul) ʃeelčoksa || (Ut) ʃeluska

「走る」：(Ew) tuus- || (Ek) tuksa- || (N) toksa- || (U) tukeæ- || (Ut) tuksa-

(Ew) s || (Ek) ks || (S) kč-tč || (N) ks-s || (U) k-h || (Oc) ks || (Na) ks || (Ul) ks || (Ut) ks~sk || (M) - 祖語 *ks
(池上 (1989:1074-76)より。略号を含め、若干改変した。太字および囲み線は筆者による。なお(M)の対応形については示されていない)

池上 (1989:1074) は、ツングース諸語における語中の 2 子音連続全般を検証しているが、そこで祖形としてあげている $-C_1C_2-$ の C_1 は、破裂音、鼻音、流音、接近音のいずれかであって、摩擦音はない。他方、 C_2 が s である祖形には、*-ls-, *-ms-, *-ns- などが再構されている (cf. 風間 (1996))。したがって、-sk- という連続はツングース諸語一般においてきわめて例外的なものであり、*-ks- > -sk- の転倒が起こったことはおそらく疑いが無い。

ただ、比較言語学の原則から言って、1 つの祖形に対してある言語で 2 つの音形が対応するのは問題だが、ここでは 4 つの言語に 2 様の対応が観察される。特にウイльта語では祖形の *-ks- から一部の語では -sk- への音位転倒が起き、一部の語では起きなかったと解釈されていることになる。

したがってここでは 3 つの仮説が考えられる：

- ① (何らかの一定の条件下でのみ) 転倒が起きた。
- ② 音変化ではなく、-sk- を持つ語を借用したか、他言語からの影響で -sk- が生じた。
- ③ そもそも祖形は 2 つあって、一部の言語ではそれらは合流した。

先行研究では、①に関して「一定の条件」が提案されているものの、それには問題がある。

本稿では、この音対応およびその祖形について再考する。結論としては、主にニブフ語からの直接の借用、ならびにニブフ語からの影響によってウイльта語およびウルチャ語の -sk- が生じたことを示す。

2. 先行研究

Benzing (1955: 29) は、まずこの音対応について次のように述べた。

エウエンキー語及びその他の *-ks-* は一般にウデヘ語では *-k-* もしくは *-h-* と対応し、満洲語では *-ks-* と対応する。ところが一方でウデヘ語では *-k-* ではなく、たいてい *-h-* が対応する一群の単語がある。その際満洲語では *-ŋg-* が対応する (以下で P.T. は Proto-Tungus を示す、筆者註) :

- (1) (P.T.) **aksa-* 「腹を立てる」, (Ek) *aksa-* (U) *ahæ-* 「追跡する」¹
 (2) (P.T.) **siiksə* 「夕方」, (Ek) *siiksə*, (U) *siikja*, (Oc) *siksə*, (Na) *siksə*, (Ma) *siiksə*;
 (3) (P.T.) **suuksa* 「ひも」, (Ek) *suksa*, (U) *sukja*, (Oc) *suksa*, (Na) *suaksə*;
 (4) (P.T.) **səksə* (**səgsə*) 「血」, (Ek) *səksə*, (U) *səkjə*, (Na) *səaksə*, (Ma) *səŋgji*;
 (5) (P.T.) **siləksə* (**səgsə*) 「露」, (Ek) *siləksə*, (U) *silijə*, (Oc) *siləŋsə*, (Na) *siləmsə*,
 (Ma) *siləŋgji*;
 (6) (P.T.) **jaliksa* 「唾」, (Ek) *jaliksa*, (U) *jalehæ*
 (7) (P.T.) **xəeksə* 「そで」, (Ek) *uuksə*, (U) *ukihæ*, (Na) *xuaksə*;
 (8) (P.T.) **ximugsə* 「油」, (Ek) *jaliksa*, (U) *imohə*, (Oc) *imuksə*, (Na) *simuksə*,
 (Ma) *(n)iməŋgji*;

(Benzing (1955: 29), 筆者訳による (文字飾り等も), 表記は池上 (1989) のものに統一した)

他方 Benzing (1955) に対する書評である Ikegami (1960) [2001] は、この揺れの原因である条件を音節の位置に求め、次のように述べた。

エウエンキー語及びその他の *-ks-* のうち、第一音節の母音の後のものはウデヘ語で *-k-* と対応する、その際 *-k-* の後の母音 *a, ə* はそれぞれウデヘ語で *æ, iə* となる。ウイルタ語では *-ks-* と対応する。ところが一方で第二音節以降のものはウデヘ語では *-h-* と対応し、後続する母音 *a, ə* はそれぞれ *æ, ə* と対応する。ウイルタ語ではこの場合 *-sk-* が対応する。

(Ikegami (1960) [2001]: 125, 筆者訳による)

Benzing (1955) 自身も「たいてい」としているように、(4) の例において、満洲語が *-ŋg-* を示しているにも関わらず、ウデヘ語で *-k-* で対応していることに注意したい。なおウデヘ語の *-h-* は *-s-* に由来することもわかっている (cf. 「目」(U) *jehæ* || (Oc) *isa(g)* || (Ul) *isal*)。なお Ikegami (1960), Benzing (1955) の両者共に、本稿で問題にするウルチャ語における対応については触れていない。両研究とも、ウルチャ語の語彙等に関する初めてのまとまった資料である Sunik (1985) が刊行されるずっと以前のものであるので、これは致し

¹ これを対応するとみたのは誤りで、(U) *ahæ-* は (Ek) *asa-*, (Na) *xasasi-* などと対応する (cf. Tsintsius et al. (1975: 54))。

方のないところである。ウルチャ語を考察対象に含んでこの対応について考察するのは本稿が最初の論考であると考えられる。

3. 研究方法

上記の対応が問題となる語彙を各言語の辞書や語彙集により網羅的に拾い出し、その対応を精査する。さらに系統の異なる近隣諸言語においても、類似した意味の語を検討する。

4. III 群の言語における対応の実際について —アムール下流域と上流域での違い—

先行研究には指摘がないが、アムール下流域のネギダル語 (I 群) およびオロチ語 (II 群) には、きわめて散発的ではあるものの、-sk- の順序の子音連続が観察される：(N 上流方言) *nuksi*, (N 下流方言) *nusku* 「犬橇の中央の引き綱」, (Oc) *diləskə* ~ *duluksa* 「唾」, とともに Tsintsius et al. (1975: 246, 509) より。

次に、III 群の諸言語についてみると、アムール中流域のナーナイ語では -sk- の連続がほとんど存在せず、逆に -sk- > -ks- の転倒が起きたとみられるのに対し、アムール下流域のウルチャ語には -sk- を持つ単語がある程度見いだされる（やはり先行研究に指摘はない）。さらにウイльта語に -sk- のあることは先行研究の指摘の通りだが、このウイльта語は系統的にみてウルチャ語に最も近く (cf. 風間 (1998, 2004)), アムール下流域よりサハリンへ進出したものとみられる。以下では III 群の諸言語における -sk- / -ks- について詳しくみる。

4.1. ナーナイ語

Onenko (1980) は約 12,800 語からなる辞典である。その見出し語において -sk- を持つ語は (ロシア語からの明らかな借用語を除くと) 以下の 7 語しか見いだされなかった (他方 -ks- を持つ語は 240 語ほど見つかるのでここには示さない)。

bilaaski 「(ふつう白い木綿の) スカーフ」, *kiriiskə* 「杯」, *maskaala*- (=masal-) 「(水が音を立てる)」, *piskəəl*- 「水を浴びせる」, *xoskaala*- (=xosakaala-) 「引っ掻く」, *əskələ*- (=osisi-) 「嫌がる」

しかも *əskələ*- 「嫌がる」を除く 3 例の動詞は、*xoskaala*- (=xosakaala-) とあるので、母音の無声化によって本来この言語に存在しない -sk- の連続が音声的に生じたものと考えられる。なお現時点ではなお十分に解明できているとは言い難いが、筆者がこれまでツングース諸語の音対応を見てきた限りにおいては、このような無声化による母音の脱落はきわめて珍しい散発的な現象であると思われる。

さらに「猫」 (< 露 *koshka*) は *kuksə* の形で記載されている。したがってこの言語で

は少なくとも一部の語で -sk- > -ks- の転倒が起こったことが考えられる。このようにナーナイ語では、本来的であり圧倒的に現れる -ks- によって、借用語もナーナイ語の音体系に合わせて音変化を起こしたものとみることができる。

4.2. ウルチャ語

Sunik (1985) はウルチャ語に関する現時点で唯一の総合的な記述であり、約 7,000 語の語彙集を含んでいる。この語彙集の見出し語から、-ks- を持つ語 102 語、-sk- を持つ語 19 語が見いだされた。この語彙集の見出し語から、語中に -sk- もしくは -ks- を持つ語をすべて集めると以下のようなものである。なお明らかな派生語は派生元の語 1 語のみを示した。biskə 「～ではないか」(おそらく bi-asi=kəə (-asi は否定) のような構成の要素から i の無声化によって生じた形) などは除いた。転倒の起きていないロシア語からの借用語は除いたが、「猫」は kəskə と記載されている。なお下線の語については、次の 4.3. でウイльта語と比較する際に問題とする。

① -sk- を持つもの (全 19 例) : aska (ačka) 「アチチッ (感嘆詞)」, asko(n) 「(戸の近くの) 古い家の隅」, askon daani 「コイマ村の場所の名」, wəsku(n) 「魚皮の加工に使う台木」, wəskə 「服の袖」, ibiskə 「ツバメの一種」, ibiskə xujuni 「女性の服の飾りのバックルの一種」, mongosko 「襟」, nusku 「犬を繋ぐ真ん中の引き紐」, pusku 「家の第一の壁」, pusku nakani 「竈に隣接したオンドルの一部」, pusku tawa 「家の中の竈」, puskə xooli 「モンゴル村にある湾」, pəsku 「アイロン」, usku 「大型の船」, aska 「ダメだ, 不要だ」, kiskin- 「跳ね返って打つ」, piskiču- 「温める」, pəskə- 「驚く, 不思議に思う」

② -ks- を持つもの

これについては、KS-1 : 「～の皮」の意のもの、KS-2 : KS-1 に準ずる意味のもの、KS-3 : その他の名詞や、形容詞、動詞のもの、の 3 種に分類した。

KS-1. bujuksə 「クマやヘラジカの毛皮」, bočaksa 「アカシカの毛皮」, gasaksama tətua 「(水鳥の頭の毛皮から作った) 子供用の外套の一種」, dawaksa 「サケの皮」, jəlikə 「イトウの皮」, mdaksa 「犬の毛皮」, ɪxaksa 「牛の皮」, koroksa 「カワカマスの皮」, kočokso 「掌のついたキツネやクロテンの毛皮」, mapaksa 「クマの毛皮」, meetaksa 「獣の頭の皮」, muuduksə 「カワウソの毛皮」, monaksa 「スキーに貼る毛皮」, mɔriksa 「馬の皮」, ŋemokso 「コクチマスの皮」, oŋdokso 「クズリの毛皮」, sɔliksa 「キツネの毛皮」, tookso 「ヘラジカの毛皮」, sɪroksa 「野生トナカイの毛皮」, səəpəksə 「クロテンの毛皮」, toksaksa 「ウサギの毛皮」, ənnəksə 「メスの魚の皮」, xɔləksu 「リスの毛皮」, čoolčiksa 「イタチの毛皮」

KS-2. aktaksama「クロテンの皮の外套（古語）」, kočiksa「犬の毛皮製の古いタイプの外套」, meetaksa「革製のベスト」, pərxiksə「ブーツの先端」, saɲmaksə「犬の毛皮製の外套」, juəksə「服の毛皮の縁飾り」, maksə「縄を作るための木の内皮」, saldaksa「古い布の種類」, saɲaksə「染料にする種類の石」, turəksə「長靴の胴」, tojksə「白樺製のゴザ」, xusəksi「(クマ祭において男が食べる)クマの胴体の前側の部分（古語）」, əəktəksi「(クマ祭において女が食べる)クマの胴体の後ろ側の部分（古語）」,

KS-3. adəliksa「古い, 使用した網」, aksawo「気を悪くする」, aksačiwə「守ってやる」, aldaksɪ「無力な, 弱い」, baksɪ「編んだもの, 束」, daliksa「袋用布, 雑巾」, aksə(n)「侮辱」, əvdaksə(n)「草原のあまり大きくない部分」, baksa tərənɪ「古いウルチャの家の真ん中の柱」, belčəksə「ダニ, 小さなクモ」, boksɪ「偶像」, boorokso「魚の腹肉の干物」, buksə「軟骨」, daksə「くっつける」, duksin-「打つ」, waksə「鼻」, gaksɪ「片方」, gasaksɪ「くやしき」, geoksa「アザラシ」, goksɪ「絹製の女性用服」, guluksə「煤」, dəksu(n)「一つの根からの低木」, enəksə「鼻水」, jaksɪ=jaksɪ ta-「歯を見せて笑う」, jəksim nəndəsowə「ひどく凍える」, jəksəl「ザクソル氏族」, jəlčəksə「唾」, iwaksə「水の表面の雪」, keeksə「ハチミツ」, ləksəgdə「ちらっと見えて消える様子」, ləksəmdi「房で, 塊で」, ləksər「(毛などが)バサバサの」, muksə「クマ祭用の木の皿」, məksɪ「バカ」, naksə-「割る」, niksəja-「(動物が)死ぬ」, nəeksə「膿」, ŋuuksə「煤, ほこり」, ŋələksu「臆病な」, oksə「木偶」, oksəkačɪ-(əksəkačɪ-)「侮辱を感じる, 腹を立てる」, puksɪ(n)「吹雪」, pərgəksu-「試す」, saaksə-「知る」, saksə「霜」, saksɪ I「カササギ」, saksɪ II「川や湖の氷の丘」, siksə「夕方」, sokso「青灰色の水鳥」, suəksə「紐」, səəksə「血」, taksa「魚料理の一種」, toaksa「石灰」, toksa「ウサギ」, təksin-「蒸発する」, təwəksə「黒雲」, təksədək (biwu)「メチャメチャな」, uksu (n)「湿気」, əksəra(n) (əksəra(n))「フクロウ」, xoldokso「板」, xumbəksənə-「(シャーマンが)現れる」, čəksɪ「ハクセキレイ」, čuksə「ベリーの汁」, əksən-「心配する」, əksu (əksu(n))「(霧などの)影」

このようにウルチャ語にも -sk- を持つ語が一定数存在することが分かった。しかも 2 語を除いて大部分が第一音節の母音の後に -sk- を持っている。中には借用語であることが疑われる意味のものもあるが、他方基本的な意味の動詞で次で見るウイльта語の SK-4 に見られた語と対応するものもある。

ここで Ikegami (1960) が示した音節位置の仮説がウルチャ語でも有効であるか検証してみると、3 語を除いて大部分の語が第一音節の母音の後に -sk- を持ち、仮説に合っていないことがわかる (太字の語)。

4.3. ウイルタ語

池上編 (1997) は見出し語約 4,500 の辞書であるが、この見出し語から、語中に -sk- もしくは -ks- を持つ語をすべて集めると以下のものであった。明らかな派生語は派生元の語 1 語のみを示した。čaaska 「取っ手のついた茶碗」 (<露: chashka), gumaska 「金」 (<露: bumashka) のようなロシア語からの借用語で、元の音連続の順序を保っているものは除いた (なおその順序は全て保たれており、転倒の起きていたものはなかった)。「猫」は kaskə であった。

さらに下記で、① -sk- を持つものについては、第一音節の母音のあとのものを、② -ks- を持つものについては、第二音節の母音のあとのものを太字で示した。すなわち、太字の語は Ikegami 1960[2001] の示した規則の例外ということになる。

① -sk- を持つもの

これについては後述するように、意味的観点から SK-1: 「～の皮」の意のもの、SK-2: 液体や粉状、雲状のもの、SK-3: 民俗的なもの・やや特殊な意味のもの、SK-4: 一般的な意味のもの、の 4 種に分類した。

SK-1. aminaska 「おすのさかなの皮」、bejšeske 「くまの皮」、dawaska 1 「さけの皮」、əninəskə 「めすのさかなの皮」、køerbeske 「去勢してないおすのとなかいの皮」、mæødæeske ~ mæødæeske 「かわうその(毛)皮」、meetaska 「となかいの頭の毛皮」、munəskə 「スキーのうらににかわではりつけたあざらしの皮やとなかいの皮」、namaska 「めすのとなかいの皮」、ŋindaska 「いぬの皮」、øereske 「ますの皮」、pætəskə 「あざらしの皮」、pəriskə 「くつの底(あごひげあざらしの皮を用いる)」、sæpəskə 「てんの(毛)皮」、sireske 「野生となかいの皮」、suliska 「きつねの(毛)皮」、ulaaska 「飼育のとなかいの皮」、xøjeske 「あめますの皮」、tuksaska 「うさぎの(毛)皮」、xaiska 「どんな動物の皮」、

SK-2. siləskə 「露」、indumuska 「なみだ」、jeluska 「よだれ」、paltuska 「かたまつた血」、tamnaska 「霧のけむり、きれぎれの霧」、təwəskə 「雲」、xuməskə 「たばこの灰」

SK-3. askuttu 「いか、たこ(軟体動物)」、əskə 「かいいい」、əskə 「人名(男)、俗称」、laskarja 「かじか」、ŋəskui kəələ 「ごまふあざらしの四歳のもの」、morisku~murisku 「がんじ(川・海にいる魚)」、piskii 「なきうさぎ」、
 esku 「くしゃみ」、buskə 「軟骨(けだものの)」、dawaska 2 「さけ・ますの孵化場」、ebuski illau(ni) 「先端に木質部をあたまのように残して棒を削り削り花をつけた木幣」、gajaska 「もも(腿)(の肉)」、muskəri 「樹木の種類(どろやなぎ)」、nusku 「いぬやとなかいがそりを引くつな」、ojosko 「移動の際そりやふねにつむためにまとめた家財(きもの・ふとんなど)のにも

つ」, silčiskə 「木に生ずる菌類の一種, ほぐち」, sinaska 「やなぎなどの樹木の内皮(樹皮の内側の皮)」, təkəkta 「手くびの突起, 足くびの突起(くるぶし)」, turəskə 「長ぐつの胴(ごまふあざらしの当歳のものの皮を用いる)」, uriski 「ほしいい(干飯)」, usku 「玄関(丸太組み家屋の)」, wəskə 「そで(きものの)」, wəsku 「木製のつち(たとえば家屋の外被にする魚皮を打つ)」, xapuska 「うきぶくろ(魚の)」, xoldosko 「棺」, **Waaska** 「人名(男)」,

SK-4. **kiska** 「少ない(多くない)」, xijosko 「あながたくさんあいている」, **askala-** 「腰に小刀をさげる」, **dəskərə-** 「はさまる」, **peski-** 「からだの発熱をひやす」, **peskiči-** 「体のうしろ側を火にあててあたためる」, **pəskə-** 「たまげる, おどろく」, **puskuči-** 「ほらをふく, 自慢ばなしをする」, **puskudə-** 「ふくれつらする, むくれる」,

② -ks- を持つもの

これについてもやはり後述するように, 意味的観点から KS-1: 液体状のもの, KS-2: 民俗的なもの・やや特殊な意味の名詞, KS-4: 一般的な意味の動詞・形容詞, の4種に分類した。

KS-1. **saaksa** 「霜」, **naaksa** 「はな(漬), うみ(膿)」, **səəksə** 「血」, **simuksə** 「油」, **tuuksə** 「液果の汁」

KS-2. **səksə** 「宵, 晩」, **səksə** 「(天にあるという架空の)nikəə(となかいなどが歩きまわって地や雪が踏んであるところ)」, **səəksə** 「皮ひも」, **suksu~səksə** 「鷹, はやぶさ」, **tuksa** 「うさぎ」, **čeeksa** 「となかいぞりの台木の前部が上の方へ反っている部分」, **dəəksə** 「かわうそ」, **gaksee** 「片方」, **gaksi(n)** 「胎盤」, **geuksa** 「ごまふあざらしの当歳のもの」, **kəkə(n)** 「鳥の胸」, **nuksa** 「溪谷」, **nuuksə** 「煤」, **oksoo** 「となかいぞり(となかい一頭で引く, ウイルタの昔からのそり)」, **tuksə** 「通訳」, **tuksərəji** 「他人の悪口を言いふらす人」, **uksara** 「しまふくろう」, **uksi(n)** 「はれもの, できもの」, **xoksigə** 「病気の種類(海の神にとがめられてなる)」, **xuksu** 「となかいの前後足のすね」, **Boksiiri** 「人名(男)」, **Dəksəənggu** 「人名(男)」, **Naaksauna** 「人名(男)」, **Nəəksinnə** 「人名(女)」, **Səkəənu** 「昔話に出る強い視力をもつ人物」, **Təəksəə** 「南カラフトの内陸の地名」

KS-3. **əksəm** 「もりあがって高く」, **aksa-** 「気を悪くする」, **daksa-** 「貼りつく」, **dəksi-** 「いそがしい」, **eksuma-** 「借りたい」, **əksə-** 「置く, しまっておく」, **əksən-** 「気にする, 心配する」, **jəksida-** 「ばかにして声を立てて笑う, 嘲笑する」, **kaksi-** 「つないであるいぬがはなれて行こうとする」, **kiraksi-** 「気むずかしくておこってばかりいる」, **laksuman-** 「近づく」, **luksuda-** 「ほらをたててだまっている」, **piksi-** 「退屈する」, **puksi-** 「音がなく放屁する」, **saaksi-**

「たずねる, 聞き出す」, tuksa- 「走る」, uksi- 「湿る」

まず -sk- を持つ語のほうが多いことがわかる。Ikegami (1960) による音節位置の仮説について検証すると, ① [-sk-] には 62 語中に 22 語の例外があることが分かる。SK-1, SK-2 には例外がないが, SK-3, SK-4 には例外が多く, 特に SK-4 の動詞は全て例外である。他方, ② [-ks-] に例外は少なく, 49 語中にわずかに 2 語のみである。

次に意味に注目すると, まず SK-1 は「～の毛皮」のような意の接辞によって形成されたものである。SK-2 は液体状, もしくは雲状のもの, という共通点を持っている。しかし② [-ks-] にも液体を示す語はいくつも見いだされる。これらはウルチャ語では全て -ks- で現れていたが, ウイルタ語では -sk- で現れることが分かる。なおこれらの接辞および接辞を伴った語との対応を示す例は他のツングース諸語にも多く見いだされるので, これらが借用である可能性はほとんどない。

SK-3 の例外の名詞には, 海の魚など, ツングースが本来知らなかったとみられる物が見いだされ, しかも他のツングースに対応語が見いだされないものが多いので, これらは借用語である可能性が強く疑われる。ただし現時点ではなお具体的な言語からの借用としての同定はできていない。

ウルチャ語で -sk- を持っていた語と重なる語もある (下線の語)。したがってこれらの語はウルチャ語とウイルタ語が分岐する以前にすでにこの順序であったものと考えられる。他方 SK-1 や SK-2 と同源の語は, ウルチャ語では全て -ks- で現れている。これらの語はツングース諸語に広く対応語が見出されるので, 祖語に遡る語であり, 両言語の分岐後にウイルタ語で転倒が起きたとみななければならない。

4.4. III 群の言語における対応のまとめ

以下に III 群において対応し, -ks- ~ -sk- の転倒に関して相違を見せる例をまとめておく。このように隣接する子音間での転倒であるため, 無声化による説明はまったく難しいものとみななければならない。液体状の物体を示す何らかの接辞 *ksa etc. があつたとすれば, やはり無声化による説明は難しい (表中の意味に下線を付した語を参照)。

表 1: III 群における -ks- ~ -sk- の対応に関する代表的な例

意味	ナーナイ語	ウルチャ語	ウイルタ語
魚皮加工の道具	wəksun	wəsku(n)	wəsku
袖	xuəksə	wəskə	wəskə
櫓の引き紐	luksur	nusku	nusku
温める	pikiči-	piskiču-	peskiči-

驚く	pəksə-	pəskə-	pəskə-
サケの皮	dawaksa	dawaksa	dawaska
クロテンの毛皮	səəpəksə	səəpəksə	səəpəskə
キツネの毛皮	soliksa	soliksa	suliska
露	siləmsə	siləmsə	siləskə
よだれ	ʃiloksa	ʃelčoksa	ʃeluska
霜	saaksa	saksa	saaksa
血	səəksə	səəksə	səəksə
夕方	siksə	siksə	səksə
ウサギ	toksa	toksa	tuksa
気を悪くする	aksa-	aksa-	aksa-

意味を太字で示した表の上部の5つの語は、Ikegami (1960) が提示した音節位置の仮説に合致しないので、その条件や原因について何らかの別の説明を考える必要がある。

5. 系統の異なる近隣言語：ニブフ語からの影響

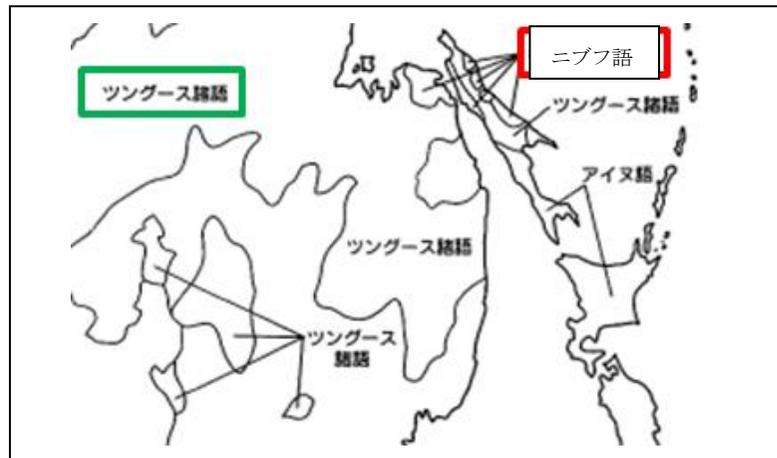


図 2: 近隣諸言語の分布

白石 (2010) によれば、ニブフ語の語中の子音連続 ($-C_1C_2-$) 一般において、-摩擦音-破裂音- の組み合わせは高頻度であるが、逆の -破裂音-摩擦音- の組み合わせは希少である² という。そもそも $-ks-$ に限らず、語中語末の子音に破裂音があること自体まれで、語末でも派生形を除けば多いとは言えないという (白石 (p.c.))。したがってウイルタ語では基層

² ただし絶対語末では $-ks$ もあるという (cf. p^huks 「手綱」, tuks 「ヒメイワタデ」, 白石 (2010: 51))。

言語ニブフ語からの影響によって -ks- > -sk- の転倒が起きた可能性が考えられる。しかも実際に、ニブフ語から借用したと思われる語が見いだされる³。

(Nvx) lasq 「かじか」 (Savel'eva i Taksami (1970: 157), Tsintsius et al. (1975: 495)) > (Ut) laskarja 「かじか」

(Nvx) askud 「少ない」 (丹菊 (編)・丹菊他 (2008: 64)) > (Ut) kiska 「少ない」

(Nvx) faskad 「おどろく」 (丹菊 (編)・丹菊他 (2008: 49)) > (Ul), (Ut) paskə- 「驚く」

(Nvx) askaska 「痛い! (強い痛みを感じた時の感嘆詞)」 (Panfilov (1968: 429)) > (Ul) aska 「アチチッ」

この語「おどろく」は(Ut)のみならず他のツングース諸語にも見いだされるが、それはアムール中流・下流域のツングース諸語にのみ存在する。

「おどろく」: (N) paskə- || (Oc) paksi- ~ paksə- || (Na) paksə- || (Na K-U) faksə- || (Ul) paksi- ~ paskə- || (Ut) paskə-

6. さらなる問題 — ウデヘ語と満洲語における 2 様の対応

以上にみたように、アムール下流およびサハリンのツングース諸語にみられる不規則な転倒の一部は、主にニブフ語からの影響および借用によって説明することができた。しかしウデヘ語と満洲語における 2 様の対応についてさらに検討する必要がある。

満洲語の逆引き辞典である Rozycki (1981) により -ngi に終わる語をみると 59 語ある。しかしその大部分の語には他のツングース諸語に対応する語が見いだせない。ウデヘ語については、語数約 3,500 の Shnejder (1936) により、① -k- (-keə / -kia / -kyə) および② VhV を収集した。これらを総合し、Tsintsius et al. (1975, 1977) によって問題となる語の対応を整理すると下記ようになる (祖語の再構形は筆者による、cf. 風間 (1996))。

①ウデヘ語で -k- が現れる語⁴

(9) 「血」 (Ek) səəksə || (U) sakə || (Oc) səəksə || (Na) səəksə || (Ut) səəksə || (Ma) səngi

(10) 「雲」 (Ek) tuuksu || (U) tokə || (Oc) tokso || (Na) təwəksə || (Ut) təwəskə || (Ma) tugi

(11) 「宵」 (Ek) siksə || (U) sikiə || (Oc) siksə || (Na) siksə || (Ut) səəksə || (Ma) *siksə 「昨日」

(12) 「内皮」 (Ek) ilaaksə etc. || (U) ilae ~ ilakə || (Oc) ilaksa || (Na) inaksa || (Ut) sinaska || (Ma) ilaxa

³ Tsintsius et al. (1975: 509) は、(Nvx) nuxt' 「櫓の引き綱」も取り上げているが、これはどちらの方向への借用か現時点では判断できない。(Ut) askuttu 「いか、たこ」は、(Ainu) at-kor-kamuy 「タコ」(萱野 1996: 21) との関連が疑われる。

⁴ 他に、①には「ひも」(U) sukia, 「犬の引き綱」(U) nuki, 「液果の汁」(U) čüenki があり、②には「霜」(U) sarjuhæ, 「唾」(U) jālehæ, 「鼻」(U) jüihæ, 「長靴の胴」(U) tiähæ, 「火口」(U) siktihæ があったが、満洲語の対応形が見出されなかったため上では取り上げていない。

②ウデへ語で -h^l- が現れる語彙

(13) 「露」(Ek) silæksə || **(U) silihə** || **(Oc) siləŋsə** || (Na) siləmsə || (Ut) siləskə || **(Ma) siləŋgi**

(14) 「油」(Ek) imuuksə etc. || **(U) imoho** || (Oc) imuksə || (Na) simuksə || (Ut) simurə ~ simuksə || **(Ma) iməŋgi**

(15) 「霧」(Ek) tamnaksə || **(U) tamnehə** || (Oc) tamna || (Na) tamnaksə || (Ut) tamnaska || **(Ma) talman**

(16) 「長靴の胴」(Ek) tiræksə || **(U) tiəha** || (Oc) tijəksə || (Na) turæksə || (Ut) turəskə || **(Ma) tura**

(17) 「そで」(Ek) uuksə || **(U) ukihə** || (Oc) uksə || (Na) xuəksə || (Ut) wəskə || **(Ma) ulxi**

(18) 「ブドウ」 **(U) sinehə** || **(Ma) siinagan**

(19) 「炭 etc.」(Ek) eella || **(U) jalaha** || (Oc) (i)jakta || (Na) sialta || **(Ma) yalməŋgi** || (P.T.) *xialsa,

(20) 「骨 etc.」(Ek) giramna || **(U) geəmahə** || (Oc) giamsa || (Na) girmaksə || **(Ma) girəŋgi** || (P.T.) *giramsa

結局 *-ks- が仮定されている対応で、ウデへ語の -h^l- に満洲語の -ŋg^l- が対応するのは Benzing (1955: 29) があげている(5) (=13) 「露」と(8) (=14) 「油」だけであり、他方、反例も(4) (=9) 「血」の1例のみである。Ikegami (1960) の音節位置の仮説からみると、①の(12) 「内皮」のみ例外となる。ウデへ語の① -k^l- に満洲語では -gi-, -ks-, -x- の対応する例もあり、② -h^l- には -x-, -ga- の対応する例もあって、満洲語の示す対応はきわめて不規則である。なおウイルタ語の -sk- / -ks- がウデへ語とも満洲語とも対応していないことが確認できる。

(19) 「炭 etc.」と(20) 「骨 etc.」では、満洲語の -ŋg^l- にウデへ語の -h- が対応しているが、祖形は *-ks- ではなく、*-ls-, *-ms- である (cf. 風間 (1996)). ここで(5) (=13) 「露」の対応に (Oc) siləŋsə があるので、ウデへ語の -h^l- に対応する祖形は *-ŋs- だった可能性が考えられる。すると、これに (Ma) では *-ŋs- > -ŋz- > -ŋj- > -ŋg^l- のような変化が、(U) では *-ŋs- > -s- > -h- のような変化が (cf. *-ns- > -s-), I 群・III 群の言語では基本的に、*-ŋs- > -ks- のような変化が起きたと仮定できる。ただ残念ながらこのような語例は今のところ1例しか見つかっていないためなお推測の域を出ない。この仮説が正しければ(8) (=14) 「油」にも(Oc)に *imuŋsə のような形が期待されるが、そうはなっていない。この点については、今後のさらなる調査と研究を必要とする。

7. まとめと今後の課題

そもそも音位転倒は他の一般的な音対応に比べて例外が多く現れ、歴史的な推移を完全に明らかにするのは難しい面があるようだ (風間 (1996: 128-130) も参照されたい)。

この -ks- ~ -sk- の転倒に関して、本稿では下記のような諸点を指摘しておく。

- ・ -ks- の順が祖語の順序である。ナーナイ語などではもっぱらこの順序が保たれており、借用語などではむしろ -sk- > -ks- の方向への転倒が観察される。
- ・ 特にウルチャ語とウイльта語が分岐する前の段階で、これらの祖語にはおそらくはニブフ語からの影響が働き、多くの語で -ks- > -sk- の方向への転倒が起きた。この傾向は両者の分岐後にウイльта語でさらに強く働き、さらに多くの語で転倒が起きた。海の魚の名など、ウイльта語およびウルチャ語で -sk- の順序を持つ語の中にはニブフ語から語自体を借用したものもある。
- ・ 借用や影響による要素を排除すると、ウイльта語の多くの語における 2 様の順序の現れはおおよそ Ikegami (1960) による音節位置の仮説にしたがっている。
- ・ 「露」(U) *siliħə* || (Oc) *siləŋsə* || (Ma) *siləŋgi* の祖形は **siləŋsə* であったと考えられる。しかしこのような対応を示す語は、現在のところこれ 1 語しか見いだされていない。
- ・ 他の言語の -ks- に対し、ウデヘ語と満洲語では 2 様の対立を見せるが、そのそれぞれはウデヘ語と満洲語の間で対応しない。つまり Benzing (1955) の推定は正しくない。
- ・ 他方、ウデヘ語での 2 様の対立は、1 例を除き Ikegami (1960) による音節位置の仮説にしたがっている。

しかしなぜ音節位置によってこのような違いが現れるのかはなお不明である。満洲語での 2 様の現れについてもまだ説明ができていない。以上のような点を今後の課題とする。

なお査読の先生方からは読み手にわかりやすくする工夫をはじめ、いくつもの貴重なアドバイスをいただいた。これによりより良い論考へと推敲することができたと思う。末筆ながらここに記して深く感謝申し上げたい。

参考文献

欧文

- Bemzing, J. 1955. Die tungusischen sprachen. Versuch einer vergleichenden Grammatik. *Abhandlungen der Akademie der Geistes- und Sozialwissenschaftliche Klasse*, Jahrgang 1955, Nr. 11. Wiesbaden, 151S.
- Ikegami, J. 1960. [2001]. Versuch einer vergleichenden Grammatik der tungusischen Sprachen (Besprechungen). *Ural-Altäische Jahrbücher*. 32, 1-2. [『ツングース語研究』東京：汲古書院 446-452. 所収]
- Ikegami, J. 1979. [2001]. Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen, *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker*, Berlin: Akademie-Verlag. [『ツングース語研

- 究』東京：汲古書院 395-396. 所収]
- Onenko, S. N. 1980. *Nanajsko-Ruskij slovar'*. Moskva: Izd. Ruskij jazyk.
- Rozycki, W. 1981. *A reverse index of Manchu*. Indiana University Uralic and Altaic series vol. 140. Bloomington: Research institute for inner Asian studies, Indiana university.
- Savel'eva, V. i C. Taksami 1970. *Nivkhsko-ruskij slovar'*. Moskva: Sovetskaja entsiklopedija.
- Shnejder, E. P. 1936. *Kratkij udjsko-ruskij slovar'*. Moskva-Leningrad: Gosudarstvennoe uchebno-pedagogicheskoe izdatel'stvo.
- Sunik, O. P. 1985. *Ul'chskij jazyk*. Leningrad: AN SSSR.
- Tsintsius, V. I. et al. 1975, 1977. *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'chzhurskikh jazykov, Materily k etimologicheskomu slovarju*, tom 1, 2. Leningrad: Nauka.

和文

- 池上二良 1989. 「ツングース諸語」『言語学大辞典 世界言語編 第2巻』, 1058-1083 東京：三省堂.
- 池上二良編 1989. 『ウイльта語辞典』札幌：北海道大学図書刊行会.
- 風間伸次郎 1996. 「ヘジェン語の系統的位罫について」『言語研究』第109号：117-139, 日本言語学会.
- 風間伸次郎 1998. 「ツングース諸語におけるウルチャ語の位罫について」角田太作（編）『少数民族言語調査報告1998』67-82.
- 萱野茂 1996. 『萱野茂のアイヌ語辞典』東京：三省堂
- 白石英才 2010. 「ソノリティから見たニヴフ語の子音連続」呉人恵（編）『環北太平洋の言語』15号, 45-58. 富山大学人文学部.
- 丹菊逸治（編）, 丹菊逸治・N. Ya. タンジナ・N. V. ニトクク 2008. 『ニヴフ語サハリン方言基礎語彙集（ノグリキ周辺地域）』. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

On the phonetic correspondence of *-ks- in Tungusic languages

Shinjiro KAZAMA

In this paper I investigate the phonetic correspondence in Tungusic languages of which *-ks- is reconstructed in the Proto-Tungusic. In some Tungusic languages this correspondence show two-way correspondences. I point out that one of the reasons of that two-way correspondence is the inflection from the other neighboring languages such as Nivkh and Ainu. Further, I examine the condition of the metathesis which had occurred in Uilta and Udihe.

The conclusions of this paper are as follows:

1. The original order is not -sk- but *-ks-. The order is preserved in Nanay, Ewenki etc. In Nanay, however, the metathesis of another direction (-sk- > -ks- (in loan words), e.g. *kuksə* < Rus. *koshka* “cat”) is observed.
2. In the stage before the diversion into Ulcha and Uilta, the metathesis (*-ks- > -sk-) of many words had occurred in the proto-language of Ulcha and Uilta by the influence of neighbouring Nivkh language. After the division into Ulcha and Uilta this tendency functioned stronger in Uilta, and the metathesis had occurred in many more words in Uilta than in Ulcha. Among the words with -sk- there are some loan words such as marine fish from Nivkh to Ulcha or Uilta (e.g. (Ut) *laskaŋa* < (Nvx) *lasq* “bullhead”).
3. The distribution of -sk- and -ks- in the words of Uilta (excluding the loan words and words with metathesis caused by the influence from Nivkh) conforms with the hypothesis conditioned by syllable structure in Ikegami (1960).
4. The proto-form of “dew” (U) *silihə* || (Oc) *siləŋsə* || (Ma) *siləŋgi* is thought to be **siləŋsə*. This kind of correspondence is attested only by this word.
5. The corresponding words with those of other languages in Manchu and Udihe show two-way correspondence. But each groups of these two-way corresponding words in these languages do not coincide. Therefore the hypothesis by Benzing (1955) is not correct. On the other hand, the distribution of two-way correspondence in Udihe can almost be explained by the hypothesis conditioned by syllable structure in Ikegami (1960).

This not clear yet why such a difference is caused by the difference of the syllable structure: furthermore the distribution of two-way correspondence in Manchu has also not been explained yet. These points need further investigation.

